



京都迎賓館の夜—ラトビア国会議長を迎えて—

池田裕子(学院史編纂室)

迎賓館とは「外国の元首や首相などの賓客に対して、宿泊その他の接遇を行うため設けられた国の施設」です。1909年に完成した日本唯一のネオ・バロック様式と言われる赤坂離宮のほか、2005年には純和風の京都迎賓館が京都御苑に建設されました。両迎賓館には一般公開日が設けられていますが、一般市民にとって実際に利用する機会はまずないでしょう。そこで、迎賓館での夕食会の様子を紹介して欲しいとの声にお応えすることにしました。

私が参議院国際部からお電話をいただいたのは2月下旬のことでした。ラトビアからソルヴィタ・アーボルティニャ国会議長を迎え、3月8日に京都迎賓館で歓迎夕食会を開催するので出席して欲しいと頼まれたのです。夕刻になって学長室から連絡があり、迎賓館に行く際は学長の公用車に同乗するよう言われました。参議院からの電話は学長室にもあったそうです。

その後、井上琢智学長ご本人から不安げな問い合わせを次々に受けました。「ネクタイと背広が気になります」「国会議長にお持ちするお土産は何がいいですか?」「言葉は? 通訳は?」等々。しかし、その頃の私は自分のことで頭が一杯でした。入試業務の出張先で左手首を骨折したため、掌から肘までギブスで固定されていたからです。右手だけで優雅に食事できるでしょうか? お箸ならまだしも、洋食だったら…。着物やドレスを着て、片手でトイレを使うのも大仕事です。普段無意識のうちに両手を使っているため、右手だけになるとお化粧も十分にできないし、髪を整えることもできません。考え始めたら不安が募るばかりなので、せめて来日されるラトビア人のお名前だけでも頭に入れておこうと、参議院から送られてきた資料を手にもブツブツ暗記を始めました。

驚いたことに、国会議長をお迎えする喜びが骨の快復に奇跡をもたらしました。当日朝、ギブスをギブスシャーレにするお許しが出たのです。シャーレなら、迎賓館到着後学長に包帯を外していただければ(実際、控えの間で見事な包帯さばきを披露されました)、ギブスなしで食事することができます。左手が動かないことには変わりはありませんが、骨折していることがバレずにすみます。

8日朝、病院に寄ってから、身支度を整え、出勤しました。正門を入ったところで、「池田さん、今日は一体何があるのですか?」と文学部の大橋毅彦先生に声をかけられました。「え? 私いつもと違いますか?」「全然違います!」。

夕食会は「藤の間」での記念撮影終了後、午後7時に始まりました。ラトビア側10名、日本側11名が掘り炬燵式の座卓に向かい合って座りました。ホストは渋谷實内閣府迎賓館長、私の両隣は天江喜七郎関西日本ラトビア協会会長と井高育央参議院国際部長で、日本側の挨拶(渋谷さんと天江さん)は英語で行われました。国会議長はラトビア語で挨拶されたので、本国外務省から通訳として同行されたオレグス・オルロフスさんが日本語に訳されました。料理は南禅寺瓢亭で、私は生まれて初めて瓢亭玉子を口にしました。

食事中的な会話は英語、日本語、ラトビア語、ロシア語が飛び交いました。隣の天江さんがアンドレイス・クレメンティエヴス国会副議長と上品な英語でお話しされているなどと思っていると、いつの間にか流暢なロシア語になっていて、片言の英語が力尽きていつの間にか日本語になってしまう私とは大違いでした。私の正面に座っておられたグンダ・レイレ国会議長室長とは、神戸市立王子動物園のズゼちゃんの話で盛り上がりました。ズゼちゃんは阪神淡路大震災後、リガの動物園から贈られたアジアゾウです。「私はリガ時代のズゼを知っているのよ。ズゼは元気になっていますか? 赤ちゃんを産んだと聞いていますが」と言われました。さらに「ズゼってとっても可愛い名前でしょう?」と同意を求められました。ラトビアでは動物に付ける可愛い名前の代表なのだそうです。途中から祇園の舞妓さん、芸妓さんも加わって、和やかな会食の席は華やぎを増し、午後9時過ぎまで続きました。

帰りの車中、宴の余韻覚めやらぬ学長から「池田さんのおかげで迎賓館に呼んでいただけました。一生の思い出になります」とお礼を言われました。そして、自らは京都駅でお降りになって、このまま車で神戸の自宅まで帰るよう私におっしゃいました。骨折中の身には何よりありがたいご配慮でした。

★前号で紹介したラトビア産オークとシラカバのその後の様子は、学院史編纂室のウェブページにて公開中★



東郷武名誉領事、井上学長、天江さん